



アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身の kiku さんがつづるふるさとエッセイ

— あいなん音故地新 —

幹

声優をとする知人がおる。会社員をしながら、10年くらい仕事としてやっとするの。出会って数年やけど、彼女の作品をいくつも見たし、最近はナレーションとしてテレビの中から彼女の声を聞くこともあった。そんな彼女は先日、尊敬する声優さんのワークショップに参加してきたんやけど…と、少し寂しそうに話しはじめた。昔ならワクワクして楽しめたのに、先日は何か違った、自分の中の「声優熱」が減っている気がする、と。私はすぐにピンときた。

それまで自分の人生の中心にあったはずのものが、消えようとする。そんなとき、今までの時間が無意味やったんじゃないか、無駄になるんじゃないか、と考えてしまう。私にも似たような経験がある。そう伝えると、彼女は『それだー!!』と声をあげた。

やってきたことは無駄になんかならん。費やした時間は『幹』や。そこから新しい枝が伸び、葉が増えて、実をつける。幹があるからぐんぐん伸ばしていけるんや。そんな話しをした後の彼女の顔は晴れやかやった。きっともう新しい枝が伸び始めとるんやわ。 (テノヒラkiku)



御荘文化センター図書室より

“7月の新着図書ピックアップ”の紹介

【落語絵本】

『耳なし芳一』

飯野 和好 (絵)・桂 文我 (文)・小泉 八雲 (原作)
BL出版 (発行)

ある夜、寺でひとり琵琶を弾く芳一。鎧を着た武者が迎えにやってきて、たどりついたのは、立派なお屋敷。それから芳一は、夜な夜なそのお屋敷で平家物語を弾き語りますが、每晚ひとりで出かける芳一を心配した和尚が、寺男に跡をつけさせてみると…。小泉八雲の代表作を落語の軽妙な語り口と、迫力ある臨場感たっぷりの絵で描く。



【評伝小説】

『見えるか保己一』

蟬谷 めぐ実 (著)
KADOKAWA (発行)

江戸時代の国学者、塙保己一。幼少期に失明し全盲となるも、学問を志し、やがて国内最大の叢書『群書類従』の編纂に取り掛かる。類稀なる記憶力で、学者として輝かしい経歴を築いていく保己一だが、その傍らには常に、妻や学者仲間、弟子らとのすれ違いがあった。盲者と晴眼者の決定的な断絶、保己一が本当に見るべきだったものとは。



御荘文化センター図書室では、毎月「御荘文化センター図書室だより」を発行しています。

図書室だよりを通じてピックアップ図書以外の新着図書情報やそのほか新しい情報を皆さまに発信しています。町のホームページにも掲載していますので、ぜひご覧ください。



愛南町
ホーム
ページ